

神に忠実に生きる

黙示録 2:8-11

ヨハネの黙示録に書かれている七つの教会に宛てられたキリストのメッセージを学んでいます。今日はスミルナの教会へのキリストの御心を学びたいと思います。実は七つの教会へのメッセージには共通したパターンがあります。まず、キリストの自己紹介があり、次に教会の現状が語られ、そして、教会に対する叱責のことばや励ましのことばが続き、最後に、天国での約束が宣言されています。ですからスミルナの教会へのメッセージも、同様に「キリストの自己紹介とスミルナ教会の現状」、「スミルナ教会への励まし」、そして「スミルナ教会への約束」の三つに分けて学びたいと思います。

1) キリストの自己紹介とスミルナ教会の現状

主イエスは、どの教会に対しても、その教会の現状を指摘する前に、まず、ご自分の姿を示されます。キリストの自己紹介ですね。スミルナの教会に対してキリストは、「初めであり終わりである方、死んでよみがえられた方」と紹介されています。創世記から黙示録、キリストはこの世を始め、そしてこの世を終えられるお方です。「死んでよみがえられた方」それは十字架に死に、三日目によみがえられたお方であるということです。つまりキリストは全知全能にして永遠なるお方であると言われます。

教会は、歴史を通して、さまざまな役割や機能を果たしてきました。教会は礼拝の場であり、学びや訓練の場であり、まじわりの場であり、助け合いの場であり、いやしの場であり、伝道の場でした。人々は教会で神を礼拝し、教育を受けました。教会のまじわりを通して実際的な助け合いをしてきました。学校も病院もさまざまな福祉施設も、もともとは教会から始まったものです。歴史の中ではそれこそその時代の文化の先端を教会が担っていたこともありました。主イエスは、教会がこの世の姿に形づくられていくのではなく、教会にご自分の姿を示すことによって、教会がキリストの姿に形づくられていくことを願っておられます。現在は社会の中で教会が存在感を示すというよりは教会の方がこの世を追いかけているような面があります。しかしみことばに「鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。」コリント第二 3:18 とあるように教会は、キリストの姿を見ながらキリストの教会らしくなってゆくものです。私たちがキリストをどのようなお方として見ているかが教会のかたちを決めてゆきます。

主イエスは自己紹介に続いて、教会の現状を指摘します。「わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。だが、あなたは富んでいるのだ。ユダヤ人だと自称しているが実はそうでない者たち、サタンの会衆である者たちから、ののしられていることも、わたしは知っている。」黙示録 2:9 主イエスが教会に対して「わたしは…知っている。」と言っておられるのは、なんと慰めに満ちたことばでしょうか。キリストは全知全能の神なのだから、すべてのことを知っておられるのは当然だと思ふべきではありません。ここで「わたしは…知っている。」とあるのは、主イエスがその能力によって知っておられるというのではなく、その愛によって知っておられる、教会の苦しみを深く理解してくださっているという意味なのです。「わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。」「ののしられていることも知っている。」と言われた主は、苦しみと貧しさを体験し、人々のののしりを受けられたお方です。「わたしは…知っている。」と言われたとき、主は、教会の苦しみをご自分の苦しみとし、教会に対する非難や中傷をご自分への非難や中傷として受けておられるのです。みなさんは他人から教会のことをあれこれ言われた時にどう思われるでしょうか？ 中にはあたっていることもあるでしょう。時には同じように批判したり、「教会とはこうあるべきではないでしょうか」と正義の味方のようなことを言う方がおられるかもしれません。しかしキリストはそれらすべてをご自分へのこととして受け止めて下さいました。人のもつ弱さとして何かあれば、それをみなキリストのせい、教会のせいにしてしまうところがあります。私も牧師として駆け出しの頃、放蕩三昧な生活を送っている男性から「何が神様の愛やねん。口先だけのええ加減なことを言うな」と怒鳴られたことがあります。思い通りにならないと様々な怒りや憎しみを教会やキリストにぶつけ

ということですね。私なら思わず「イエス様は何かあなたにひどいことをされたのでしょうか？」と言いたいところです。しかしイエス様は十字架に架けられた時でさえ「父よ、彼らを赦したまえ。彼らは何をしているのか分からないのです。」とおっしゃったように、その理不尽な怒りを黙って引き受け、私はあなたを赦しますと言われるのです。そして、自分のしていることに気が付いた人に「私があなただけを赦したように、あなたがたも赦し合いなさい」と言われるのです。

主がスミルナの教会に「わたしは、あなたの苦難と貧しさを知っている。」と言われたように、事実スミルナの教会は貧しくなりました。当時はまだ教会堂というものがなく、人々は裕福なクリスチャンの邸宅に集まり、そこで礼拝をしていました。しかし教会を迫害した地方の役人たちは、そうした裕福なクリスチャンを的にし、その財産を没収しました。そうすればクリスチャンは礼拝する場所を失って散り散りになり、またその財産も地方の役人の懐に入るというわけで、それこそ迫害をする人には「一挙両得」でした。クリスチャンを迫害すると儲かるというわけです。多くの裕福な人々が財産を奪われ、一夜にして貧しくなりました。教会は迫害によってメンバーを失い、財力を失いました。スミルナの町は、小アジアで三番目に大きく、また美しい町でしたからスミルナ教会もきっと豊かな教会だったことでしょう。しかし、教会は迫害により貧しくなってしまうました。スミルナの教会の人たちは、貧しくなった自分の姿を見て嘆いたかもしれません。しかし、主イエスは「あなたは富んでいるのだ。」と言われます。それは、地上の財産のことではなく、信仰の富のことです。ヤコブ2:5に「私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。」とあります。教会は、迫害によって人数を減らし、財産を失い、人の目にも、自分の目にも貧しく見えたことでしょう。しかし、主イエスの目にはそうではありませんでした。迫害によって本物のクリスチャンが残ったために、教会の霊的な力は高められ、地上の財産を失った分だけ、信仰が増し加わり、霊的に豊かな者になったのです。自分の目だけで自分を見てはいけません。主イエスの目で自分を見ましょう。神が自分を見ておられるように自分を見るようにしましょう。その時、私たちも「悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。」コリント第二6:10とすることができるようになります。私たちも、信仰に富む教会、御国を相続する教会でありたいと心から願います。

2) 教会への励まし

次に教会への励ましのことばを見ましょう。10節に「あなたが受けようとしている苦しみを、何も恐れることはない。見よ。悪魔は試すために、あなたがたのうちのだれかを牢に投げ込もうとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあう。死に至るまで忠実でありなさい。」とあります。主イエスは、さらに迫害の手が伸び殉教者が出ることを預言したうえで、「忠実であれ。」との励ましを与えています。

主イエスが教会に求めておられることは、ただひとつ、忠実であることです。主は私たちに、才能や目に見える結果ではなく、忠実さを求め、それを喜んでくださいます。主が喜んでくださるのは、教会の人数でも力でもなく、忠実さです。「忠実」ということばは「信仰深い」という意味合いがあり、何も文句を言わずに言われたことをするというよりも、キリストを信頼してそのことばの通りに従うということです。教会が主に対して忠実であるなら、神はかならず教会に救われる人々を、まことの神の民を多く与えてくださり、伝道の力を与えてくださいます。もし、教会が霊的に停滞しているなら、どこか主に対して忠実でないところがあるからです。それを悔い改めないかぎり、決して前進することはできません。悔い改めなしに、人間的な方法で教会を元気付けようとしても、それは、一時的なもので、決して教会を生かすものにはなりません。もちろん、教会を上から目線で評価したり、批判していても教会を活かすことにはなりません。

私たちは主が教会に託してくださったものに忠実でなければなりません、では、主が教会に託してく

ださったものとは何でしょうか。多くのものがありますが、第一のものは、福音です。神からの救いのメッセージ、みことばです。主イエスは「全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」マルコ 16:15 と教会に命じられました。福音の中心はイエス・キリストご自身です。主イエスはスミルナの教会に「初めてあり終わりである方、死んでよみがえられた方」と自己紹介をされました。教会は、主イエスのおことばどおりに、主イエスが人となってこの世に来られたこと、私たちの罪のために十字架で死なれたこと、三日目に死人の中から復活されたこと、やがて来て救いを完成させてくださることを、あらゆる努力をして人々に伝えなければなりません。福音を宣べ伝えるのに、知恵や知識、巧みな弁舌やコミュニケーションの技術などが必要なこともあるでしょう。しかし、何にもまさって大切なのは、福音に対する「忠実さ」です。教会は福音の管理者であり、管理者に要求されるものは「忠実さ」です。社会は常に変わっていきます。教会が置かれている地域も変化していきます。伝道するのに、良い時もあれば悪い時もあります。今は、おそらく、霊的には「悪い時」でしょう。聖書は「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」テモテ第二 4:2 とみことばに忠実であるように命じています。私たちは、今、忠実でしょうか。

「死に至るまでも」というのは非常に強いことばです。殉教することがあっても、なお忠実でありなさいと教えられています。「殉教者」という言葉は「証しをする」ということばから来ています。すべてのクリスチャンは証し人です。殉教者は死をもってキリストを証ししましたが、私たちは、毎日の生活をもって証しをします。死によってであれ、日々の生活であれ、私たちもキリストの証し人、福音の証し人であることは、殉教者と変わりません。「死に至るまで」とは「地上を去る日まで」という意味にとることもできます。生涯の終わりまで、それこそ死を迎えても主の証し人であり続けるよう、主は、私たちを励ましておられるのです。

3) 教会への約束

最後に「教会への約束」を見ましょう。主イエスは、主に対して忠実な者に、「そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与える。」と約束しておられます。聖書には「朽ちない冠」(コリント第一 9:25)、「喜びの冠」(テサロニケ第一 2:19-20)、「栄光の冠」(ペテロ第一 5:2-4)、「義の冠」(テモテ第二 4:8)など、さまざまな冠が出てきますが、これは、信仰生活がオリンピックの競技にたとえられていることと関連があります。古代オリンピックでは競技に勝った人に月桂樹の冠がかぶせられ、その栄誉がたたえられました。しかし、木の葉で作られたものはやがて朽ちていきます。たとえ金や銀で作られ宝石で飾られた冠であっても、永遠ではありません。しかし、主がくださるのは、朽ちることなく、いつまでも無くなることのない、永遠の「いのちの冠」です。それは永遠の命が与えられていることを意味しています。

私たちは、イエス・キリストを信じたとき、永遠のいのちを受けました。キリストを信じた者は、神の子どもとして生まれたのです。神の子どもを生かし、育てるのは、神のいのち、永遠のいのちです。両親から受け継いだ肉体の命は、使えば減っていく命で、寿命が尽きるとき、人は世を去るのですが、永遠のいのちは増えていく命です。肉体の命がなくなっても、たましいは永遠のいのちに生かされ続けるのです。永遠のいのちは、地上では、人の目にあきらかではありませんが、世を去るときにはそれは形をとって現れます。キリストが再び世に来られるときには、キリストにある者は復活し、栄光のからだを受け継ぎます。永遠のいのちが完全な姿を表わすのです。主イエスに忠実な者は、永遠のいのちと死後のいのち、そして復活と栄光のからだを与えられるのです。

「初めてあり、終わりである」主イエスが信仰の競走のスタートであり、ゴールです。あなたの信仰は主イエスから始まっているのでしょうか。そして、主イエスを目指しているのでしょうか。そうであるなら、必ず約束の「いのちの冠」を受けます。今週も主イエスから目を離すことなく、主イエスを目指してあゆんでまいりましょう！祈ります。